日本近現代文学における中国人苦力の表象

―中国東北地域を舞台とした作品を中心に―

（要約）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D175687

氏　　名：郭　璇

本論文は、近現代日本文学作品において〈満洲の苦力〉を表象する代表的な作品の分析を通して、そこに投射された作家の「苦力」認識を明らかにするものである。

「苦力」（以下、苦力と記す）は、とりわけ 1945 年前の中国において用いられた、いわゆる中国人の不精錬労働者を指している。日本の作家による中国に対する従来の認識について、特に上海と東北地域（すなわちかつての「満洲」）に関わる日本人作家の作品の研究が進められている。だが、満洲に関する研究は、ややもすれば、作家の視点を、一律に帝国主義、植民地主義の文脈で捉えようとする傾向があり、それが具体的にどのように表現されるかという点の分析は十分ではない。さらに、従来の研究は中国像を概括する傾向が見られ、〈苦力〉によって示される中国像に焦点を絞り、その系譜を辿る研究はほぼ見当たらない。

本論文は、満洲を舞台とした作品を中心に考察する。また、時間軸に沿い、1900 年代から戦後にかけての、各時期の作品における苦力像に焦点を当てる。近代の作家たちはどのように苦力を表現したのか、なぜ苦力の描写に腐心したのかを明らかにする。それと同時に、苦力の表象に投射された近代日本のナショナリズム、また国家、民族、階級が交差する視点を明らかにし、近代日本における日本人作家の中国認識についての手掛かりを提示することを試みる。

本論文は全十章から成る。

第一章では、満洲における苦力に着目した研究の背景や意義を述べる。また、先行研究をまとめ、研究対象及び方法について説明する。

第二章では、まず苦力に関する研究書に基づき、苦力という概念や歴史を述べ、また本論文で扱う作品に表れる苦力の生活・風俗の基本的事項について整理する。満洲の苦力は「不精錬労働者」であり、主に満鉄あるいは日本の会社に雇用され、日本の支配下におかれた「最下層の」人間という性質を帯びていた。続いて、中国人作家による労働者の描写の変遷を整理する。彼らは日常生活で苦力と接触する機会がほぼなかったため、「苦力」という用語をめったに登場させることがなく、時期によって描写する対象が流動的な傾向にあった。これに対して、日本人作家の多くは満鉄に何らかの関係を持つ人物であり、頻繁に「苦力」と直接に接触していたため、作中で「苦力」が一つのシンボルとして定着したと考えられる。

第三章では、1900−1910 年前後の作品、いわば本格的に中国に接近した日本の知識人による中国人イメージを代表する作品として、夏目漱石の紀行文「満韓ところどこ

ろ」を考察する。漱石の中国人への理解の背景を探るために、当時の『朝日新聞』の関連記事を把握した上で、漱石が旅で出会った様々な苦力の描写を分析する。彼らの印象は全体的に「汚らし」く否定的なものであったが、他方で大豆油工場の苦力には肯定的な評価も見られるなど、その認識は一様ではなかった。また、作中の苦力以外の中国人像は個別的かつ肯定的なものであり、苦力との対比が歴然としている。その上で、サイードの理論を援用することにより、主体である漱石と観られる他者としての苦力との間に、植民地支配を根拠とする不平等な権力関係があることを指摘する。

第四章及び第五章では、プロレタリア文学隆盛期の満洲に流亡した作家であった里村欣三の小説「苦力頭の表情」と平林たい子の小説「敷設列車」の苦力像を検討する。前者については、「満洲の苦力」の表象を、同時代の関連テクストも引きながら「ロシア淫売婦」の表象と比較する。「ロシア淫売婦」が美しさ、エキゾチズム、セクシュアリティの表象であるのに対して、「満洲の苦力」は階級、インターナショナリズムの表象として描出されている。また、主人公の「俺」の捨て子という設定と、「俺」と苦力及び淫売婦との関係から、「俺」が苦力を蔑視することによって日本人としてのアイデンティティを確立したことを論じ、里村が階級を相対化するまなざしを持ちながらも、差別の意識から逃れえないことを指摘する。

「敷設列車」について、「苦力の全体像」、「一般的日本人の偏見の打破」、「個性的な苦力像」と「革命的闘争の苦力像」の四点から苦力の特徴を見れば、勤勉で労苦に耐え、足るを知り、自身の考えを持ち、己れの権力を守るという主体性のあるイメージが浮かび上がる。さらに、知識人の植民地の労働者による代弁という視点から、両作品を比較する。里村が苦力に単一的なイメージを与えて、彼らを客体化してしまうのに対して、たい子は日本人の視点を脱し、苦力に〈主体性〉を与え、彼ら自身に語らせようとしている点で、プロレタリア文学において特異な位置を占めると考えられる。

第六章では、満洲詩壇の隆盛期に誕生した『燕人街』などの詩誌に掲載された苦力に関する詩について考察する。満洲詩壇の史的展開からすれば、『燕人街』と『戎克』は満洲プロレタリア詩の隆盛期における代表的な詩誌というべき地位にあったと言える。そして、『戎克』の代表的な詩「苦力養殖公司」の分析により、苦力を通して植民地主義下の満洲下層社会の暗闇が、超現実主義の手法を用いつつ表現されていることを指摘する。また、『燕人街』の苦力を描写した諸作品を取り上げ、同誌の詩人たち

が苦力の視点から彼らの心の声を語ろうとしていることに注目し、詩人たちが苦力の代弁者であろうとしたことを論じる。さらに、満洲事変後の苦力詩も視野に入れ、韜晦的暗喩の技法を用いて帝国主義と封建主義への抵抗が続けられていることを提示する。このように、満洲プロレタリア詩は簡潔に満洲の現実社会を表現する独自性を帯びたものであり、苦力たちの心の声を活写しようとしていたのである。

第七章及び第八章では、傀儡政権「満洲国」が成立した後に創作された、「満洲文学」の代表作家の牛島春子「苦力」と八木義徳「劉広福」における〈民族協和〉の意味を考察する。「苦力」では、日本人監督の野村が、苦力と親しい関係を築き上げ、苦力もまた野村を受け入れていく過程を通して、満洲人と日本人の協和する様子が描出されている。だが、牛島春子の語る民族協和の理念は表現上の問題点があり、〈民族協和〉がかえって損われていることを指摘する。また、その表層的で滑稽な苦力像を、「祝といふ男」と比較することにより、春子自身の〈民族協和〉の観念を再検討し、春子が抱える矛盾と内面的葛藤を明らかにする。

「劉広福」については、主人公の「私」と苦力の劉広福との間に友情が芽生える過程を注目し、苦力の表象としての「劉」が、植民者が求める理想的な人物像であることを確認した上で、劉の特徴的な考え方である「没法子」を、八木義徳の経歴および人生観と関連づけて分析する。八木にとっての〈民族協和〉は従順を前提とした〈協和〉であり、春子が〈民族協和〉の矛盾への葛藤が生じているのは対照的に、八木義徳は自身と劉との〈友情〉を素朴に信じていることを論じる。

第九章では、戦後の自伝的作品として、水上勉「瀋陽の月」と宮尾登美子「朱夏」とを比較する。「瀋陽の月」の苦力は、水上の植民地体験のなかでも象徴的なものであり、水上と等身大の「ぼく」の〈自己〉の描写から、水上は自分の加害者としての行為に反省の念を滲ませると同時に、そうした立場に立たざるをえない被害者としての意識も潜んでいる。一方、「朱夏」においても宮尾と思しき主人公・綾子の〈自己〉の描写から、満洲時代の日本人植民者の苦力への偏見や苦力に対する無意識的な優越感を、一人の女性としてのまなざしから、反省する姿が浮かび上がる。そして、戦後の両作の共通するのは、苦力そのものを恣意的に描写することよりも、むしろ苦力を通して作家の〈自己〉を表現することへの志向が見られることである。

以上により、苦力の表象は、その時々の情勢が刻印された、時代と社会の表象であったと言える。また、各時期の作家たちの苦力へのまなざしと彼らに対する認識は、

時代と社会、作家の経歴、身分や表現手法などの影響によって差異はあるものの、その特徴は以下の五点にまとめられる。第一に、満洲苦力を描写した作家たちは、いずれも実体験に基づいた、一種のリアリズムに近いまなざしで苦力を表象した。第二に、複数の作家に共通する、固定化したフレーズが見られる。第三に、多くの作家たちの苦力へのまなざしは複雑なものであり、一律にそれが植民主義や帝国主義によるものと断ずることはできない。第四に、植民地支配の直接的主体であった男性作家のまなざしと、間接的主体にとどまった女性作家のまなざしには差異が見られる。第五に、多くの作家は、日本人植民者の視点で苦力を語り、偏見と差別を免れない一面があったが、そうした日本人としてのまなざしから脱し、苦力の心の声を聞こうとし、作品の中で彼ら自身にそれを語らせた作家もいた。

そして、日本人作家たちが満洲の苦力の描写に腐心した要因として、以下の四点が指摘できる。苦力が満洲まで落ちのびた多くの日本人の出自と同様の下層民で共感が持ちやすかったという点、満鉄との直接的な接触があるゆえに、満鉄による苦力への暴行といった植民支配の内実を知る立場にあった点、また苦力が植民者としての特権意識を保つのに不可欠の存在であった点、彼らが被植民者の典型であり、植民者としての日本人のアイデンティティを構築するための助けとなった点が挙げられる。

このように、文学における苦力の表象から、時代と社会、また近代日本のナショナリズム、階級、民族、国家との結びつきを確認し、日本人作家の中国認識の一側面を明らかにすることができたと考える。